

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二
新橋演舞場別館
電話 (五四一) 五四七一番

清元協会

港区南青山二の十七の十三の一〇二
電話 (四〇二) 〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館
電話 (五七一) 〇二一六番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六
電話 (四四四) 三〇二〇番

社団法人 長唄協会

新宿区高田馬場一の五の二一の三〇七
電話 (二〇八) 〇二〇七番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話 (五八五) 九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和五十三年二月五日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演

第二部 四時半開演 八時終演

'78 都民芸術フェスティバル

第八回 邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

「邦楽演奏会」によせて

東京都知事 美濃部 亮吉



最高の芸術を最低の料金で、できるだけ多くの人々に鑑賞していただきたい———こういう願いで始められた都民芸術フェスティバルも、今年で十周年を迎えました。ヨーロッパの各都市では、毎年冬の訪れと共にオペラシーズンが開幕し、週末にはオペラを楽しむ人波で混雑する光景がよく見受けられます。

私も都知事に就任早々、東京の芸術文化政策の貧しさを痛感し、都民芸術フェスティバルを始めました。十年たった今日、冬から春にかけて催されるこのフェスティバルは都民の間にすっかり定着し、参加作品も年々厚みを増して、都民を心底うならせ、堪能させております。

自然のみずみずしさが、干からびた大都会を潤おすように、芸術は日々の喧噪にささくれた私たちの心を慰め、励ましてくれます。都民のみなさんがすぐれた芸術と出会うことによって、えがたい精神の滋養を受けとってほしいと思います。

今年もこのフェスティバルに多くの芸術家や芸術文化団体が参加してくれました。今回公演の一つである「第八回邦楽演奏会」の力一杯の活躍を期待しております。

第一部番組（十二時半開演）

一、箏曲 楓

の 花

箏替手

米川 敏子
米川 ますみ
辻本 親登代

箏本手

米川 親利
米川 和子
米川 めぐみ

尺八 藤井治童

二、義太夫

絵本太功記十段目
尼ヶ崎の段

光秀 竹本素八

十次郎 竹本朝重

初菊 竹本土佐菊

操 竹本駒竜

さつき 竹本越

三味線 鶴澤駒登久

三、宮園節 鳥

辺 山

浄瑠璃 宮園千可代

同 宮園千ふじ

同 宮園千俊

三味線 宮園千智恵

同 宮園千しな

四、箏曲乱

輪

舌 (みだれ)

箏替手

吉田純三
伊藤松超
萩岡信一

箏本手

山勢司都子
高橋正喜子
廣末佐喜華
小林風隆
稻垣博保

五、常磐津釣

女

浄瑠璃

常磐津 文字太夫
常磐津 小文字太夫
同 常磐津 和佐太夫
同 常磐津 一三太夫

三味線

常磐津 文字兵衛
同 常磐津 八百八
上調子 常磐津 子之助

六、清元明烏花濡衣 (明烏)

浄瑠璃

清元 梅寿太夫
清元 登志寿太夫
同 清元 政栄太夫

三味線

清元 梅吉
同 清元 吉寿郎
上調子 清元 吉志郎

七、長唄有喜大盡

唄

吉住小三郎
吉住小三治郎
同 吉住小蓮次
同 吉住小真吾
同 吉住小三蔵

三味線

稀音家 六四郎
稀音家 六勝郎
同 稀音家 六嘉秀
同 稀音家 和隆
同 稀音家 六喜郎

陰離子 望月左之助 社中

第二部番組（四時半開演）

一、河東節 泰平住吉踊

浄瑠璃	山	山	山	山	山	三味線	山
彦	彦	彦	彦	彦	彦	山	彦
綾子	ひな子	祐子	京湖	由記子	上調子	山	彦
					同	山	貞子
					同	山	科子
					同	山	さと子
					同	山	莊子
					同	山	河良

二、義太夫 壺坂寺の段

三十三所花の山

沢市	竹本	土佐廣	三味線	豊澤	仙廣
お里	竹本	春華	ツレ弾	豊澤	公治
観世音	豊澤	公佳			

三、箏曲 六段の調

箏替手	藤代	文津奈	箏本手	野坂	恵子
米川	裕枝		川原	直子	
			三絃	矢崎	明子

歌詞と解説 (演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、箏曲 楓かえでの花はな

京都の松阪検校の作曲で、作詞は尾崎六夫という人。作曲年代ははっきりしないが、明治中期ごろと思われる。内容は、京都の嵐山を中心とする周辺の風景をのべたもので、題名は歌詞の中の「散るは楓の花ならん」からとったもの。

楽曲の形式は手事物形式で、明治新曲の典型的形式といえる。前弾・前歌・手事・後歌・後弾となっている。純箏曲として作られたもので、三絃の手はなく、箏の高低二部合奏曲に連続音の尺八がからんで縫って行く。全体が華やかな春の気分がするのは、調絃によるところが大きく、陽音階的になっているからである。

へ花の名残も嵐山、梢々のあさ緑、松吹く風にはらはらと、散るは楓の花ならん。
へいせきを登る若鮎の、さばる水のみごもりに、啼くや河鹿の声澄め

も、これ今生の暇乞い、この身の願ひ叶うたれば、思ひおく事さらになし。十八年がその間御恩は海山かえ難し、討死するは武士の、習いと思召し分られて、先立つ不孝はゆるしてたべ。詞二つにはまた初菊殿、まだ祝言の盃を、せぬが互いの身の仕合せ、わしが事は思ひ切り、他家へ縁付して下され、討死と聞くならば、さこそ歎かんと憫やと、孝と恋との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立聞く涙まろび出で、わつとばかり泣き出せば、はつと驚き口に手をあて詞アアコレ声が高い初菊殿、さては様子。アイ、残らず聞いておりました、夫の討死あそばすを、妻が知らいで何としよう、二世も三世も女夫じやと、思うているに情ない、盃せぬが仕合せとは、あんまり聞えぬ光義様、祝言さえもすまぬ内、討死とは曲がない、わしやなんぼうでも殺しはせぬ、思ひ留って給われと、すがり歎けば詞アアコレあなたも武士の娘じやないか、十次郎が討死は子での覚悟、ばば様に泣顔見せ、もし悟られたら、未来永々縁さるぞや。エエ。サア、とこういう内時刻が延びる、その鑑櫃ここへここへ、アイアイ、さ早う、時延びるほど不覚のもと、ききわけないと叱られて、いとしい夫が討死の、かどでの物の具つけるのが、どう急がる物ぞいのと、泣く泣く取出す緋緘の、鑑の袖にふりかかる、雨か涙の母親は、白木に土器白髪のはば、長柄の銚子蝶花形、首途を祝う熨斗昆布、結ぶは親と小手脚当、六具かたむる三三九度合この世の縁や割小札、猪首に着なす鍬形の、あたりまばゆき出立は、さわやかなりしその骨柄、詞オオ天晴れ武者振いさまし、功名手柄見る様な、祝言と出陣を一緒にの盃、サアサア早う、目出度い目出度い嫁御寮、と喜ぶ程なおいや増す名残り、こんな殿御を持ちながら、これが別れの盃かと、悲しき隠す笑い顔、随分お手柄功名して、せめて今宵は凱陣をと、後は得言わす喰いしぼる、胸は八千代の玉椿、散りてはかなき心根を、哀れをここに吹送る、風が持ってくる攻太鼓、氣をとり直しつ立上り詞いづれも、さらばとい捨て、思ひ切ったる鑑の袖、行方知らずなりにけり。(中略)

ここに苜取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現われ出たる武智光秀。必定久吉この内に、忍びるこそくつきょう一、只一討と氣は張弓、心は矢竹藪垣の、見越の竹をひっそぎ、小田の蛙の啼音をば、とどめて敵に悟られじと、合差足拔足、窺いより、聞ゆる物音心得たりと、突込む手練の槍先に、わつとたまぎる女の泣声、合点ゆかずと引出す手負、真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒詞アアこは母人か、しなしたり、残念至極とばかりにて、流石の武智も仰天し、只茫然たるばかりなり、

る、大堰の岸ぞなつかしき。

へ川上遠く時鳥、しのお初音にあこがれて、
へ船さしのぼし見に行かん、戸奈瀬(となせ)の奥の岩つつじ。

二、義太夫 尼ヶ崎の段

絵本太功記十段目

「絵本太功記」は、近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作で、寛政十一年(一七九九)七月豊竹座初演。

「真書太閤記」・岡田玉山の読本「絵本太閤記」などで知られた秀吉の一代記から、信長と光秀の反逆、秀吉の高松城攻撃などを、一日一冊に日を追って十三冊(段)にした。したがって、段目もそれぞれ一日の段、二日の段という名がつけられている。

この中では十日の段(十段目)が、俗に太十(たいじゅう)といわれ、文楽でも歌舞伎でも、もつともよく上演される。それは、内容的にも変化があり、また、歌舞伎でいうと、光秀を座頭(ざがしら)、妻の操を立女方、十次郎を花形役者、初菊を若女方、皐月を老女方というように、一座の俳優の役割りに都合が良かったためもある。

光秀の母皐月のかくれ家に、光秀の子十次郎が出陣の願ひに来て、初菊と祝言して出かけて行く。旅の僧となってこの家へ入り込んだ久吉を討とうと、光秀が一間の内へ竹槍を突き入れると、皐月が身替りに刺され、光秀をいさめる。十次郎は傷をうけて帰る、味方の敗戦を知らせて死ぬ。あらわれ久吉は光秀に、天王山で勝負を決しようといつて別れて行くまで。

今日は時間の都合で、一部分をカットして演奏します。

へ一間へ入りけり。残るつぼみの花一つ、水上げかねしふせいで、
思案投首しおるるばかり、ようよう涙押しとどめ、詞母様にもばは様に

声聞付けてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、ノウ母様か惜けない、この有様は何事と、すがり歎けば目をみひらき詞歎くまい、歎くまい、内大臣春長という、主君を害せし武智が人類、かくなりはつるは理の当然、系図正し我が家を、逆賊非道の名を穢す、不孝者とも悪人とも、たとえがたなき人非人、主君を討って功名願、たとえ將軍になったとて、野末の小屋の非人にも、おとりしとはしらざるか、主に背かず親に仕え、仁義忠孝の道さえたば、もつそう飯の切米も、百万石に増るぞや、おのれが心只一つで、しるしは目前これを見よ、武士の命を断つ、刃も多いにこのような、ひっそぎ竹の猪突槍、主を殺した天罰の、報いは親にもこの通りと、槍の穂先に手をかけて、えぐり苦しむ氣丈の手負、妻は涙にむせ返り詞これ見給え光秀殿、軍の首途にくれぐれも、お諫め申したその時に、思ひ留って給わらば、こうした歎きはあるまいに、知らぬ事とはいいなから、現在母御の手にかけて、殺すといはエエマ何事ぞいの、せめて母御の御最後に、善心に立かえると、たった一言聞かしたて、拜むわいのと手を合わし、諫めつ泣いつ一筋に、夫を思う恨み泣き、操の鏡曇りなき涙に誠あらわせり。

三、宮園節 鳥とり 辺へ 山やま

宮園節は、もと上方に生れ、幕末ごろから江戸に定着した浄瑠璃です。江戸では、むしろ園八節といういい方で知られており、独特な三味線の音色と、哀切な語り口は、永井荷風の小説「雨濺々」にも描かれております。

京都市郊外、東山の中腹付近の鳥辺山または鳥辺野というあたりは、男女の心中道行にふさわしい場所として有名です。

それでこの鳥辺山を舞台にした事件は、古くはおまん源五兵衛、お染半九郎などで知られていましたが、明和四年(一七六七)ごろ、宮園節に作曲され、集大成されました。

この曲は、宮節の代表曲で、幽玄な中にも妖しいばかりのなまめかしさを漂わせております。
なお、お芝居でよく上演される「鳥辺山心中」は、大正四年に岡本綺堂がこれらの実説やいつたえをもとに創作したものです。

一人来て、二人連れ立つ極楽の、清水寺の鐘の聲、はや初夜もすぎ、四つも告げ、九つ心も、恋路の闇にくれば鳥、あやなき空や、浮橋に、つながらる縁や縫之助、つい仇惚れも誠となりて、ほんの女夫になりたいたと、思う思いはままならぬ、今はこの身に愛想もこそ、二上りへ尽きた浮世や、いざ鳥辺野の、女肌には白無垢や、上に紫藤の紋、中着緋紗綾に黒縹子の帯、年は十七初花の、雨にこがる立ち姿、男も肌は白小袖にて、黒き輪子に色浅黄裏、二十一期の色盛りをば、恋という字に身を捨小舟、どこへ取りつく、島とても無し。本調子へきく度々にうらかりし、父母の事思ひ出し、あとの嘆きを思ひやり、ここから去んで呉竹の伏し沈みたる袖の露、浮橋涙もろともに、父さんや母さんのあるはお前も同じ事、その親々に苦をかける、不孝者には誰がした、合惚れという仲人や、枕の咎じやないかいな、恋は心の外とやら、夕べも内の花車さんが、わしに意見を真実の、色という字があればこそ、好かぬ勤めの辛抱も、好いた殿御へ心意気、いと可愛が定ならば、五度逢うものを三度逢い、二度を一度の逢瀬には、親おやかたの機嫌もよく、色で身をうつこともなく、世間に多い心中も、金と不孝で名を流す、色で死ぬるは無いぞとよ。恋は思ひのはじめにて、盛りが憎い迎い駕籠、そのきぬぎぬや朝顔の、夕顔にまでわけへだて、辛気な苦界まなならぬ、悲しいことや辛いこと、生きる死ぬるの手詰にも、必ずかならず若気を出し、短気な心持ちやんなやと、重ね井筒の上越した、粋な意見も上の空、お前に迷う心から、面白い気で聞いていた、親御様へも世の義理も、わしから起るこのしだら、堪忍してとはかりにて、すがり付いて泣きいたり、二上りへ思い切らしやられ、もう泣かしやんな、わしは泣かぬとソレこなさんの、いいやそなたの、いやこなたのと、顔と顔を見合わせて、一度にわつと嘆くにぞ、一足ずつに消えて行く、終にこの野の春降る雪や、折からにはや寺々の鐘も撞きやみ、夜はしらじらと、鳥辺山にぞ着きける。

四、箏曲乱

俗に「みだれ」といい、近世箏曲の祖といわれる八橋検校（一六四一―一八五）の作曲。第二部の「六段」も同じ作曲者である。純器楽曲で段物あるいは調べ物という部類に入る。「六段」などの段物は、各段の区切りや拍子の数がきまつているのに、この曲ではそれが一定せず乱れているからこの名がある。なお「輪舌」というのは、雅楽の「輪説」という特殊な演出様式から出たものだが、俗説も多くある。またふつうの段物は、次第にテンポが速くなっていくのに、この曲だけは途中で急にゆっくりとなる場所があるが、これも曲名の原因の一つであろう。以上のようなわけで、この「みだれ」は段物の中では例外曲となっている。型を破った曲なので、近代的な感覚があるが、よくきいてみると、搔手（かきて、隣り合った二本の糸を一緒に鳴らす手）が多く、それが一種の不協和音的な効果をあげていることに気がつく。これがやはり近代的な感じを受ける原因である。

五、常磐津釣

河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部作曲。明治十六年十二月

に発表されました。のち明治三十四年「戒詣恋釣針（えびすもつでこいのつりばり）」という題で舞踊劇として上演されてから、とくに知られ、流行するようになりました。
狂言の「釣針」の趣向をそのままかりたもので、おおらかさと滑稽さの対比が見事にあらわされております。太郎冠者が鯉女を釣り上げるところが、とくに面白くなっております。

へそもくこれは猿樂の、昔よりしてその技の、おかしいい狂言師名に大蔵や鷺流の、姿をうつす釣女。大名へかように候者は、この所の大名にござる。ヤイヤイ太郎冠者あるか。太郎へハア、おん前に。大名へいたか。太郎へハア。大名へ汝も知る如く、この年まで定まる妻がない。うけたまわれれば、西の宮の恵比須三郎殿は、福者と申すこと、これへ参り、妻を申しうけようと存ずる。汝、供をせ。太郎へまことに仰せの如くでござる。西の宮の木びす三郎殿へ参るがよさうございませう。私も定まる妻がございませぬ。ついでながら申しうけませう。大名へさてさて、己れは卒爾な事をいうものじや。あびす三郎殿とこそええ、きびす三郎と申す事があるものではない。太郎へハア、絵にかいた折はあびす三郎と申し、木で作った折は、木びす三郎と申します。大名へなかなか汝は物知りでおりやる。それがしは道不案内じやほどに名所旧跡を語りませよ。太郎へ畏まってござる。大名へして、向うに見える山は何山じや。太郎へハア、あれは山でござる。大名へここは夏山葉山じやが、何と申す。太郎へエエ何山は山でござる。オオそれへあん山からこん山へ、飛んで出たるは何者ぞ。頭にふつ、ふと二つ細うて、長うてりんとはねたを、ちやんと推した。謡へ兎じや。大名へ何を申す。して西の宮はまだか。太郎へもはやこの森の中でござります。大名へさらば参詣をいたそうぞ。太郎へハア。大名へまづ鱈口にとりつこう。じやがんく。いかに申し上げ候。われ今年まで無妻なり。大名へ三郎殿の利益にて、定まる妻を授け給え。へ授け給えと、一心こめて伏し拝む。大名へヤイヤイ太郎冠者、汝も拝め。太郎へ畏つてござる。じやがんく。いかに木比須三郎殿へ申し候。へわれも定まる妻はなし。似合相応美しき、妻をお授けく、と、三拜九拜したりける。大名へヤイヤイ太郎冠者、今宵は通夜をしよう。汝もまどろめ。太郎へ畏つてござる。大名へあら尊や。へ内陣の内を床しきわが妻を、千代と契らん手枕の、袖をおおうてまどろみしが、程もあらせず夢さめて。

大名へヤイヤイ、お告げがあった。汝が妻になる者は、西の門の一の階にあらう程に、連れて帰れ、とお告げが。太郎へこれは如何な事、私がお告げもその通り。大名へ急いで参ろう参ろう。へ勇み悦ぶ足元に落ちたる竿を取り上げて、大名へヤ、これは如何な事、妻ではのうて、竹の先に糸がついてある、これは何であらうぞ。太郎へ不思議なお告げでござります。大名へヤ、これは悟った。恵比須殿はふだん釣竿をはなさず、釣ばかりしてござるによつて、この針で妻を釣れということである。まず急いで釣ります。エイ。へ釣ろよ。神の教えの釣針を、おろし、みめよき妻を釣ろよ。合へ針をおろせば、へ不思議やな、気高き女を釣りあげて、大名へアラありがたや、さてもよい妻がかかってござる。嬉しや。太郎へ何がさてお喜びでござる。大名へこれ、そなたは定まる妻じやによつて、目をかけてやる程に、夫を大事にしましうぞ。ヤ小野の小町か楊貴妃か、アラ美しい。太郎へヤヤ申し。道々こつそり楽しもうと、背中へ入れてきたこの吸筒、お二人様の三々九度、これにてめでとう御祝言。大名へヤこれは一段の事じや。サアサア注げつけ。太郎へ心得てござる。大名へまず女子の方よりさしませ。女へ申しわが夫、必ず見捨てて下さるな。大名へなんの見すててよいものか。女へオオ嬉し。大名へ太郎冠者、祝して一つ謡うてくれ。太郎へ畏つて候。へ高砂や、この益が、へ二世の縁、神の御前で祝言は、三郎様がお仲人、よしそれとても浮気心があるなら、ほんに罰が当るであるぞいな。必ず見捨てて下さるな。やいのやいのと寄り添えば、へかたえに聞きいる太郎冠者、気をもみあせり。太郎へヤ申し、その釣竿を私にお貸し下され、見事釣つて見せませう。大名へ早う釣れ。太郎へヤ釣る段ではござらぬ。エイ。へ釣ろよ。釣るものは何々。鯛に鱈に恵方棚に撞き鐘、信田の森の狐にあらぬ釣針を、さげておろして三十二相、揃うた十七八を、釣ろよ。へおかつさんを釣ろよ。へ余念もながき鼻の下、オオ当るぞ当るぞ。どつこいしめたと引き上ぐれば、かつぎ目深にかつぎし女。アラ尊や、かかったわ。サアサアこちへござれ、嬉しや。へサアサアこれからは三々九度の盃じや。これへござれ。何も恥かしい事はない。そなたと夫婦になるならば、春は花見、夏は涼み、秋は月見の酒盛に、冬は雪見のちんく鴨、天にあらば比翼の鳥、地にまたあらば連理の枝、必ずそもじは変るまいな。悪女へ何の変つてよいものかない。太郎へまづ何はともあれ御面相を。へかつぎをとればこはいかに、河豚に等しき

醜女ゆえ、太郎へやア、和御寮は鬼か、ばけものか。のう消えてなくなれ。悪女へのうわが夫、今おっしゃった楽しみは、嬉しゅうて嬉しゅうて、わたしは忘れはせぬわいなア。太郎へやレ情ない、ゆるしてくれ、ゆるしてくれ。悪女へそりやつれないぞえ、太郎冠者どの。へコレこちを向かんせ。エエ何じやいなア。へ思えば深い恋の測、沈むわが身を釣糸に、へ結んだ縁の西の宮、ひる子儲けて二世三世、へ変らぬ色は樟竹の、末葉栄ゆる女夫仲、離れはせじと取りすがる。大名へめでたいな。太郎へおめでとうござります。へ笑い興ぜし能舞台、鏡の松の常盤津に、昔にかえる岸沢の、波の鼓のうちより、睦まじかりける次第なり。

六、清元明烏花濡衣

ふつう「明烏」といえば、新内節の代表曲で、浦里時次郎の名はあまりにも有名である。
嘉永四年（一八五一）江戸市村座の二月狂言で「仮名手本忠臣蔵」裏表二十二段という大作を上演のとき、八段目の裏に浦里（初世坂東しうか）時次郎（八世市川團十郎）でこの「明烏」を出すことになった。が、新内節では長すぎるし、舞台効果もうすいところから、当時名人といわれた清元太兵衛（二世延寿太夫）に、清元として作曲するように頼んだ。そこで太兵衛は作者の桜田治助と相談して、冗長な部分を削り、舞台に向くように文句を変えて作り直したので、新内にくらべるとよほど簡明でわかりやすくなっている。そして太兵衛の美音と、團十郎、しうかの演技と相まって大好評を博し、以後は「忠臣蔵」とは関係なく上演されるようになった。

〔上の巻〕

へ白雪の、積もるも恋にたくらべて、とけぬ思いを浦里が、どうした縁

へ突き出だし、門の戸はたと締めにけり。

〔下の巻〕

へおりふし降り来る雪ふぶき、内には亭主が浦里を、庭の古木にくくりつけ、簾おとり声あらげ、
亭主へやい／＼浦里、その苦しみは心がらだ。総別遊女を折檻して、客をせくこと客のため、二つには女郎大切、身代がなお大事、あの客もまだ若いようだが、あんまりしげ／＼通われちゃあ、親がかりなら勘当うけ、また主持ちなら親方の手前、仕損うは知れたことだ。この中年期を切り替へしも、皆あの客のため、この上は心中するか駆け落ちか、とどのつまりは知れてある詮索だ。や、いくらいつてもきき入れのねえこうつくばりめ、あの時次郎のことをすっぱりと思いついてしまやあがれ、これ男ども、浦里を気をつけい。
へと、いい捨ててこそ奥に入る。へ浦里あとをうちながめ、別れとならば今さらに、涙にくれていたりしが、
浦里へあの時さんは、どこにどうしていさんすことじゃやら、ま一度顔が見たい、逢いたいわいなあ。
へ昨日の花は今日の夢、今はわが身につまされて、義理という字は是非もなや。
浦里へあの二階で弾く三味線を、きくにつけても思ひ出す、いつぞや主が居続けに、寝巻のままに引き寄せて、弾く三味線の面白さ、それにひきかえ、今宵の苦しみ、ああ味気ない浮世じやなあ。
へ好いた男にわしや命でも、何の惜しがるぞ露の身の、消えは恨みもなきものを、
浦里へわしがこの身はどうなるとも、
へたとえこの身はあわ雪と、ともに消ゆるもいとわぬが、この世の名残に今一度、逢いたい見たいとしゃくりあげ、へ狂気の如く心も乱れ、涙の雨に雪をけて、前後正体なかりけり。へ男はかねて用意の一腰、口にくわえて身をかため、忍びしのびて屋根伝い、見るに浦里嬉しやと、悲しきこわさ危なきに、可愛と一声明烏、のちの浮名や残るらん／＼。

でかの人に、逢うた初手から可愛さが、身にしみじみと惚れぬいて、あけてくやしき髪、なであげ撫で上げ、

浦里へ浦里、もう誰も差し合はないかや。
浦里へ見世が出たれば今の間は、誰も来ることではござんせぬわいな、時次郎へやれやれこの広い二階に身一つの、おきどころのないというは、ああ因果な身になったことじゃなあ。
浦里へさあこのようにせきせかれ、さぞ氣づまりでござんしょう。それをこらえて下さんすも、みんな私が可愛いと、思うてのお志、嬉しゅうござんす、かたじけないわいなあ。
へ抱き締むれば、いやおれ故と引き締めて、物をもいわずしめ合いて、あとは涙にくれけるが、

時次郎へいつまでこうしていたとでも、限りもなき二人が仲、長居するほどそなたの身づまり、このほどだんだん話す通り、かのお人へ色々手を廻し、いい入れても叶わぬ望みと、願い書までもつき戻されし身の本意なき。

へそなたも共にといいたいが、いとそなたを手にかけて、どうなるものぞ長らえて、わが亡きあとで一遍の、回向を頼むさらばやと、いい捨て立つを、へあもし、とりついて、あんまりむごい情なや、今宵離れてこなさんの、何故にいうては下さんせぬ、殺しておいて行かんせと、男の膝に縋りつき身をふるわして泣きいたる。へ遣手のかやが声として、かやへ子供や、みどりや、あ誰もいないのか。お浦里さんえ。

浦里へあい／＼おかやどん、何の用でござんすえ。
かやへほかの用でもござんせぬが、ゆうべから居続けの客人、ありやどこのお方でござんすえ。
浦里へさあどこやらの御息さんじやということでござんす。
かやへいえ／＼そうは抜けさせぬ、たしかにせかれたあの時次郎、むむ旦那さんが呼んでじや、さあござんせ、ええござんせ。

浦里へこれおかやどん、どうぞゆるして下さんせ。
へ一間のうちより山名屋四郎兵衛、
山名屋へええ、まだるい／＼、そんな甘口できくやつじゃねえ、さあ、おれといっしょに失しやがれ。

へ罪も報いも後の世も、白髪頭のこめかみも、張り切るばかりのやら腹立ち、引きたててこそ降りにける。へあとに大勢男ども、屏風のうちの時次郎、無二無三に引き出だし、踏むやら打つやら叩くやら、すぐに表

七、長唄有喜大盡

明治四十二年五月、長唄研精会で初演。中内蝶二作詞、三世村屋六四郎（稀音家浄観）・四世吉住小三郎作曲。
「忠臣蔵」から題材をとったもので、大石内蔵之助が主人公。主君の敵を油断させるため、内蔵之助は祇園で放埒の限りをつくして有喜大盡と呼ばれている。前半は「忠臣蔵」七段目と同じ趣向で、喜剣にその真意をためされ、なぶられるところ。喜剣が去ったあとで、お軽の浮橋が東国へ行く述懐、終りに討入りを匂わせてある。
舞踊からはなれて自由な形式をとり、長唄として新機軸を作った作品で、ついで発表された「紀文大盡」とともに双壁をなす。
曲の中では、はじめの二上りの踊り唄、喜剣があらわれてからの三下りへうきという、文字は……、有喜大盡自作の唄という形で唄われる三下りの隆達節へ四条の橋から……、やはり三下りのへふけてくるわの……のしんみりした情緒など、唄いどころ、きかせどころの多い名曲として、よく演奏される。なお本日は時間の都合で、一部分をカットして演奏します。

二上りへとても立つ名に寝てござれ、寝ずともあすは寝たと算段しよ、喜剣へわれは喜剣と申す九州男児、大石殿に逢いとうて参った者じや、そと取り次いでもらいたい。
踊り唄へ花の踊りをのう、花の踊りをのう。
喜剣へ笹屋と書いた行燈の文字、有喜大尽の遊び茶屋とはたしかに読めた、誰を取り次ぎが頼みたい。
踊り唄へ花の踊りをのう、ひと踊り。
三下りへこれは如何なこと、さきほどから頼んでいるに、そなたはつんばか但しは氣遣いか、われら如きの無骨者、揚屋の掟ちつと

も存せぬ、無礼は許せ、まかり通る。

へうきという、文字は一つをさままに、とけて嬉しき恋の謎、喜びありや有喜さんと、うたわれたさの酒機嫌、世をいつわりの狂態も、人は知らじなわが心、野辺の狐火小夜ふけて、燃ゆる思いをかこつに、本調子へあだしこの身をや、煙となさば、せめて廓のさと近く、くるわのや、くるわのせめて、せめて廓のさと近く、

大石へやあこれへ、きのう祇園で逢った喜剣殿よの、ようこそ御入来、亭主はいぬか挨拶せい、朱雀の通りで、梵字九郎というあはれ者を、取っておさえた薩摩の御浪人、喜剣様とはこなたのことじや、ぬる爛持て来て叱られぬ、女もあるたけ狩りつくして、

へそれ御機嫌をとせき立つれば、亭主は心得、がってん合点、亭主へ噂よきいたか。

女房へあい／＼合点じや。

へかざす扇の舞いの手や、袖にも雷のひらひらと、天の美祿の爵金香、わくや琥珀の盃に、酌めども尽きぬ楽しみを、へよそに喜剣は膝立直し、喜剣へはじめて呑うた揚屋の酒、苦いわにがいわきつう苦いわ、内蔵殿、これでも甘いと、きけば毎夜の御遊興、われら一向合点がまいらぬ、そのわけ聞こう。

へとつめ寄れば、

大石へなに、聞きたい。

へと、けげんな顔、へじつとにらんで、

喜剣へ心底きこう。

大石へわれらが新作ききたいとは、料と呼ぶる有喜が面目、どれとれおさかなに、

へと弾く三味線の、絃の音はじめもたわいなく、三下りへ四条の橋から火が一つ見ゆる、火が一つ見ゆる、あれは二軒茶屋の火か、あれは二軒茶屋の火か、円山の火か、エエそうじやえ、ええそうじやいな。

喜剣へねむけもよおすそのざれ唄、火の講積ききには来ぬ、さては噂にきく通り、敵討つ気はないと見えるな。

大石へけもないことさ。

喜剣へおのれ浪人の面汚し、赤穂でうて阿呆浪人、大石などとは片腹痛い、軽石の浮き足さむらゐめ。

大石へさればこそ、うき大尽じや。

第二部

一、河東節 泰平住吉踊

元禄（一六八八—一七〇三）のころ、外記節という音楽があった。はじめたのは、薩摩外記直政という人で、この音楽はやがてすたれてしまい、のちに復活したものとして、長唄にいくつか伝わっている。それを河東節の方では、初世十寸見河東（ますみかとう）以来、預かり浄るりとして今日まで語り伝えてきた、といわれている。

摂州住吉明神で行われる住吉踊を主題としているので、古風な民謡、神事などが巧みにとり入れられ、とくに終りの方にある二つの大きな合の手は、他流には見られない特色をもっている。

純粹に江戸生れ、江戸育ちの河東節が、この曲を伝えてきたというのは、意義もあり、元禄時代の気分を伝えている貴重な曲といえよう。

へ千早振る、神のひこさの昔より、へ神をいさめの御祭、なびくは風のいとすき、にっここと笑うかんばせは、さてもいつくし夜目遠目、月の召したる笠のうち、へなかに傘鉾、かさほこいろ／＼の、うちわ扇の模様よく、傘をさすならば、エイ／＼／＼春日山、これも神の誓いよ、人が傘をさすならば、エイ／＼／＼我も傘をさそうよ、げにもそうよ、ヤヨげにもそうよのと、げにまこと、暑さしのがんしばしとて、片山里

喜剣へだまれ軽石、緑ぬす人とはおのれが事じや、人の皮着た大きむらい、さあ這え、這わぬか、畜生め。

へと、ののしる声にわな／＼／＼、ふるえながらの四つん這い、へ喜剣はあくまでいきどおり、

喜剣へ畜生ならばこれを食らえ。

へと、毛膚の裾を引きまくり、皿にありあうたこなます、へ突き出す下顎、へ足蹴にかけ、いずこともなく立ち去りぬ。合

三下りへ更けて廓のよそおい見れば、宵の灯し火うち背き寝の、夢の花

さえ散らす嵐のさそい来て、へ萱野にそそぐ村時雨、虫の鳴く音もかれて行く、物の哀れを身一つに、集めて胸の乱れ髪、へ誰に思いをうちあけて、へつげの小櫛もさすが涙やはら／＼袖に、露のよすがの憂き勤め、こぼれて袖に、つらきよすがの憂きつとめ。

大石へ浮橋か。

浮橋へおお有喜さんかえ。

へ君に近江の嬉しい仲も、苦い潮の水さされ、よるべ定めぬうたかたの、いっそ泡とも消えはせで、浪にまかす浮寝鳥。

浮橋へわしや行くぞえ。

大石へ行くとはどこへ。

へほんに浮世を捨草の、露と消えなば恨みもせまい、明日は根引きの里

離れ、なんの因果で東の園へ、

大石へ植えかえらるる心底か。

浮橋へ目ざすは敵の、

大石へああこれ。

ナゲ節へかたい枕も垢づく衣の、姿やつれし身の行方、

大石へさすがは三平が妹軽殿、兄者も父君も成仏しようぞ。

へ名残はつきぬ盃に、とめてかいなき花の香を、袖に包めど小笹のあられ、こぼれやすさよわが涙、へどうぞこの身は親はらからの、ために沈みし恋の淵、底の心は月こそ知らめ、へ程は雲井に隔つるとも、夢の浮橋中絶えじ、へ雁の便りにことづての、主様参る結び文、へ封じ目かたき約束を、はたす嬉しき雪の夜に、寝耳を破る山鹿流、打つや太鼓の音も湧えて、ほまれは高くひびきけり。

に、住吉の御神事なれば打ち出でて、また手に入らぬ踊りぶりが面白や二つ揃う声、四社のお前の反り橋は、誰が架けたやら中高に、サア住吉様の、岸の姫松めでたきよ。小松のかけの下露に、よその袖までしつぽりと、濡れて浜辺の濡れ鷺か、沖に鷗がとん友呼び交す、はんま千鳥のちりやちり／＼／＼、ちりやちり／＼、ちとも漕ぎ出せばう、から船の音か、しつとん、しつとんからころり、からころり／＼、からころりんと、賤が手織りや布引の、滝の白糸打ちはえて、天津乙女やさらすらん。星か沢辺の螢かと、かのやさ人の歌の種、よむや真砂の数々も、波となぎさに身を暗らす、されば祭の姫小松、おっとり揃えて千代八千代、中なる女の舞の袖、今日の御祈禱なり。へ在原や、へ高天原のその昔、天津岩戸の神歌を、謡うていざや清むべし。とう／＼／＼たりたりら、ちりやたりはさて如何に、これ真言の秘密にて、絶えずとうたり滝の鼓は、福寿円満太平楽を調ぶるなり。また万代の池の亀、甲にいたたく三極は、渚の砂さく／＼として、神のうちには延命長寿、万歳楽、万歳楽、誠かや、堺浦には宝船が着くとの、ともえには、伊勢と春日と中は住吉四社の神、君が代は久しかるべきためしは、かねてぞ植えし岸の姫松めでたきよ、颯い奏でて舞いうたう。合へその時命あらわれ給い、よきかな／＼、我はこれ住吉の明神なり、汝まことの道守りつつ、我をいさむる神祭、など納受のなからんや、天下泰平国土安穩と守るべし、夢々疑うことなかれと、のたまう御声ともろともに、御神体はたちまちに、みこしと変じ、合へ給いけり。へげに神國のその不思議、ちようさ、ようさの神いさめ、有難かりける次第なりとて、貴賤上下おしなべて皆感ぜぬものこそなかりけれ。

二、義太夫 壺坂寺の段

三十三所花の山

原作者未詳。二世豊澤団平、加古千賀（団平の妻）改作加筆。明治二十年二月、大阪稻荷彦六座初演。

大和の国壺坂の里に住む盲目の座頭沢市は、世をひがみ、

歌舞伎舞踊の座頭物の一。盲人の生活や風俗、動作などを主題とするのは、能狂言以来の伝統があり、これらの座頭は盲人の官職名ではなく、一般名称としてあつかっている場合が多い。座頭物は、表象として杖を持ち、音曲を多く伴うのが特色としてあげられる。

「ひよつくり／＼」と犬に追われて出た盲人が、履物をとられたり、犬を相手におかし味を見せるといふもので、梅に驚……のしやれた唄、へ花に置く霜……の伊勢音頭、へ目には見えぬ……の園八ガカリ、クドキのへ姑嫁ふる……など、唄いどころ、きかせどころの多い曲。内容的にはあまり意味がなく、当時の流行唄を中心とした世相のようなものが感じられる。

前弾へひよつくり／＼ひよつくりひよつと、罷り出でたる、やつがれば、色にも酒にも、目無し鳥。どっこいそうは虎の皮。まわしのはしは取られても。恋の手取の。やさ法師へ中々その手じやまいるまい。わるじやれなへ梅に鶯垣に朝顔。按摩針。まんざら退いた中じやないへ一番相撲でまいるべいへ引捨て負い投げ。内無双、獅子のほら入り。ほら返り。へええ、畜生奴と負け腹で、追えど叩けど。へくる／＼／＼くる／＼とへああほつとしたええまよへまわる音頭の一節は音頭へ花に置く霜小笹のあられ、こぼれやすきよ。我が涙。よいやさよんやなへええ、又してもしつっこい。杖振上げて打たんとせしが。いや／＼／＼これでは行かぬと氣を変えて、こい／＼／＼マこれ、わんじやいなそのようにへわしをじらすが楽しみか、主の毛色のよし悪しはへ目には見えぬと初雪や、その足跡の。梅が香のへ洩れて暮うも。遠吠えの声で聞き知る私じやものを、あんまりむごいと寄り添えはへされて添い寝の仇枕、ぞめきも通う紙ぎぬたへ姑嫁ふる、嫁下女をふる、下女はなあえつるべの繩をふる、ずいとこきやいつかな構う事はねえへわしが願いが叶うならば、今の浮世に一人寝せず寝もせまい、ずいとこきやいつかな構う事はねえへせまい浮世じや、ないかないなへ我等も浮かれ座頭の坊、おや／＼／＼また悪洒落めが杖と笛へ首探しの身は四つ這い、後を慕うて、走り行く。

言詞もかたくなに、へ烏帽子素袍を仮りそめならめ、頼うだ人の御名代、御用であらば横柄に、太郎冠者あるかやい。へはあ御前にとつづ／＼。へこちちもとどより使われ者よ、色恋の道しら川や、人目の関の袖様ならで、綱引き餌引き四ツ手引く、山じやえ、山じや木を挽く麦の白、廻らばまわれ伊勢道者、昔は車今は銭、投げさんせ／＼、編さん紺さん花色さん、こうれこれ／＼小紋さん、やてかんせと、引き戻されたあ長編手、心も優な太郎冠者。へははははは、もう道草のおどけはとりおいて、さあお館へ。へいや／＼、まだめつたには帰らぬわいな。へそりやまた何故でござりますな。へさあ、御主人経春様、毎年の吉例ゆえ、弓矢と鞆をこのように持たせて、氏神様へ参らせ給えど、今年はいこう鞆が損じた。戻りには鞆になる皮をととのえて来いと、いつかかって来たわいな。へはて女中には以合わぬことを仰しやりつけてござりますな。へ話し半ばへ向うより、手飼いの小猿の折よくも、二人が中へかけ込めば、びつくり飛びのき、へやあ何だと思つたら、こりや猿であつたわえ。へおや、ちようどなところへ離れ猿、皮をとつて幸いの鞆に。へいえいえ、こりや大方主がござりませう。何でも猿遣いなどが放した猿と見えます。へそんならその主に断らねば悪いかえ。へなにしろこの主に逢いたいものだなあ。へ見るやこなたへきよろ／＼目。へこいら在所の得意旦那をくるりくるりと猿廻し、二上りへ隣り村から今日この村の、葺屋町へと御鼻頂の、風に廻されまつかいな赤かんべ、初心は知れた初舞台、罷り出たため出放題、酒のさの字のその暇に、見失つたる猿丸の、迷子のまいごのお猿やい、と呼子鳥、紅葉にあらで咲きまざる、まさるめでたき猿曳きが、紋もでつかい裏梅が、梅の林をうかれる。へおお太夫ここにいたか、さ、ここへ来い／＼、寄るを隔てて、へすりやその猿の主は貴様か、これ／＼何と物は相談じやが、その猿をどうぞゆずつてはくれまいか。へめつそや、この太夫殿を手放しまして、明日から商売がなりませぬ。へなるほどもつともじやが、あれあそこにごさるお女中は、更科水経春様というお大名の御代参、今度暗弓の御遊に、大内で用ゆる鞆に猿の皮が入り用じやほどに、あなたに猿を売ってはくれまいか。へいえ何ぼう大内の御遊でも、こればかりは御めん下さりませ／＼。詫ぶるに、へこなたはつけあがり、へそんならどうでもならぬといやるか、女とあなどり上様の、上意をききやらねば仕様が。へ素袍投げかけ大名の、威を張りつめし弓張りの、矢先鋭く立ちかかる。猿曳おどろき飛びしきり、へああもし、待つて下さりませ、なるほどこ

五、常磐津 花舞台霞の猿曳(うつば猿)

二世中村重助作詞、五世岸沢式佐作曲。天保九年(一八三八)十一月江戸市村座初演。

狂言の「鞆猿」を脚色したもので、すっかり歌舞伎化されているのが特色。舞踊としても今日大いに流行している。奥女中の三芳野が、主人の名代で鳴滝八幡に参詣するため、奴の橋平を連れて来かかります。そして、主人のいつつて大内で用いる鞆(矢を入れるいれもの)の皮を探していることを話し合っているところへ、一匹のはなれ猿が走ってきます。それでこれ幸いと連れ帰ろうとします。そこへ猿廻しが追つて来て猿を返してくれと頼みますが、きき入れません。それで猿廻しはあきらめ、猿に因果を含めて手ずから打ち殺そうとすると、無心の猿はそれとも知らず、しきりに船をこぐまねをします。猿廻しが悲嘆の涙にくれると、三芳野も哀れをもよおし、猿の命を助けてやり、そのお札に猿廻しは猿を舞わせるという筋。

常磐津がよくできており、全体に天保時代の江戸の泰平気分があふれており、変化もあつて楽しめる曲となっている。

へ時一陽来復の、当りを願う弓始め、弓欠八幡大名の、頼うだ人の代参に、向い町からまた今年、帰り申しの願事の、恋という字を花うつば、背中にしよつた太郎冠者、傘をさそなら春日山、霞をわけて梅笑う、春の野面の色含む、ここ鳴滝の花の顔見世。へ立帰り、今を春迎と梅花の色香争う源平の、それは隔てし播磨海、都の中は穂かに、袋に弓の八幡大名、へ頼うだお人は北面の、更科主人経春様、今日例年の弓始め、なお泰平を祈りのため、この鳴滝の八幡宮へ、御名代の三芳野様、お役目御苦労に存じます。いえ、その御苦労は橋平殿も互いの事、願ひ叶うてまた今年、お前と二人物詣で、こんな嬉しい事はござんせぬ、もう御代参の役目しもうたからは、春の野もせを眺めながら、さあ／＼一緒と手を取ると振り払い、へああこれはしたり、寄らしやりますな、狂

うなるからは、猿の皮をあげましようが、射殺されては猿の皮に疵がついて役に立ちますまい。はて、どうかしようかと、小首傾けうなずいてへおよい事がござります。猿の一打ちと申して急所がござりますほどに、皮にも疵のつかぬように、打ち殺して上げましよう。へそんならきつと打ち殺して、さ、早う渡せ。へはつ。へ畏こまつてござると立ち上り、またあるまじき御望みは、ただ今殿様殺せとある。ならぬといえは俺ともに、ただ一矢にて射殺すと、ひくに引かれぬ強弓の、仰せはかなさ、そちがかけにて衆々と、暮せしものを情ない、へ畜生なれどもよききよ、へせめて今度は人間に、生れ変つてくるように、教えこんだる一節に、へええ、さりととは、ええ、またあろかいな、さんな、またあろかいな。へ是非なくも立ち上り、振りあげし鞆の下、廻る小猿のいじらしさ、へあれ／＼今の御覧なされし。打ち殺さるる鞆とは知らず、船漕ぐまねをしますわいの。へそんなら何という、殺さるるとは知らず、芸をするかや、へ畜生でさえ物を知るに、いかに主命なればとて、へものあわれもかえりみず、どうしてそれが殺されよう。命を助けて連れて帰らや。へええそれはまことでござりまするか。へおいのう。へやれ／＼嬉しや／＼お札に猿をまわせましよう。天下泰平御武運長久御祈禱に、猿が参つて能つかまつる。へ御知行も、まさるめでたき、踊るが手許おもしろや。はんやこりや／＼。黄金の数々積み揃え、庭に黄金の花盛り、花実も栄うめでたきよ。(中略)へそりに三人立ちかかり、届かぬ梢の綱渡り、三筋の霞猿曳きや、橋かおる花舞台、笑い興じて祝しける。

六、箏曲 寿くらべ

作詞者未詳。幕末の天保ごろ二世山木太賀作曲。浦島太郎が竜宮へ行く故事をはじめに、乙姫と色模様、玉手箱をあけて老人になるまでを簡潔に描写し、老人になった悲しみよりも、長寿のめでたさを祝い寿くらべという内容。敬老会のように

な催しに封切されたといわれている。

爽快でこの曲独特の前弾にはじまり、へ浦曲はるかに漕ぎ出でぬ」のあとの合の手は、船ばたを叩いての出船の様子、へわれはそも……」から三味線は一メリとなつて平家ガカリで平曲の節、へわだつみの」の前の楽の合方から以下は、一中節の「墨絵の島台」を巧みにとり入れ、二上りのへ君がえにし……」のクドキから貝づくしなど、ききどころをかきせところの多い名曲。

二世山木大賀は美声で知られ、一中節を山田流にとり入れた功業者。その味を十分に生かした名曲として知られている。

前弾へ寿は峻山にして千歳ひいで、また蒼海の限りなき、南の星の影ひたす、岩根の波の名に高き、天の橋立文も見す、水の江というみやび男あり、月雪花の折々に、都の手振りうとからず、心も軽き春風に、釣棹とつて青柳の、糸くり出す一葉船、鏗つり鯛つり七日まで、家路忘れて住の江や、浦曲はるかに漕ぎ出でぬ。

合へああいぶかしや、正しく釣りしは亀なるを、いとやんごとなき上臈の、折ればこぼるる笑みの露、初花桜に驚の、初音添えたるばかりなり。合へわれはそも竜の都の者なるが、へ君をともない申さん、いざもろともにと浦島は、とこよの国に至りけり。衆へわだつみの、わだつみの、神の宮居のうちのべの、妙なるうちにいつまでも、思い渚にうちつれて貝や拾わん、玉や拾わん。

へ君がえにしは紫の、深き色貝千種貝、たまの逢瀬はななだに、思い通した女気は、風に乱れぬ玉簾、すだれ貝とのへだては憂しと、くねる目もとの汐貝は、なでしこ貝のしどけなく、物思うとは白玉か、何ぞと露の仇言葉、つい口玉にかけられて、手枕ふれし朝寝装。

へたのしき中に故郷を、かつ惚ばれてたち滞り、乙女が与えし玉くしげ、あけてのどけき如月の、花のむしろにまどいして、寿くらべ千代くらべ、山にくらべてこの君の、高き齢を祝しけり。

七、長唄船辨慶

謡ガカリへ今日思ひ立つ旅衣、今日思ひ立つ旅衣、掃落をいつと定めん。舟慶へかように候者は、西塔のかたわらに住まいする。武蔵坊舟慶にて候。さてわが若判官殿は、頼朝の御代官として、平家を滅ばし給い、御兄弟の御仲日月の如くに御座候べきを、言いかいなき者の讒言により、御仲違われ候こと、かえすがえすも口惜しき次第にて候、しかれどもわが君、親兄の礼を重んじ給い、ひとまず都を御開きあつて、西国の方へ御下向あり、御身に過りなき通りを御嘆きあるべきために、今日夜をこめ、淀より御船に召され、津の国尼ヶ崎大物の浦へと急ぎ候。本調子へ頃は文治の初めつ方、頼朝義経不会の由、すでに落居し力なく、判官都をおちこちの、道はるかなる西国へ、まだ夜深くも雲井の月、出ずるも惜しき都の名残、一年平家追討の、都出にはひきかえて、ただ十余人すこと、さも疎からぬ友船の、上り下るや雲水の、身は定めなき習いかな。謡ガカリへ世の中の人は何とも石清水、人は何とも岩清水、澄み濁るをば神ぞ知るらんと、高き御影を伏し拝み、行けば程なく旅心、潮も浪もともに退く、大物の浦に着きにけり。舟慶へいかに申し上げ候、恐れ多き申し事にて候えども、静を御供にては今の折節、何とやらん似合わぬように候えは、これより都へお帰しあれかしと存じ候。義経へともかくも舟慶はからい候え。舟慶へかしまつて候。いかに静殿、御心のうち察し申して候、さりながら、世の人口もいかにつき、これより都へ御帰られとの仰せにて候。静へ静は君の御別れ、やる方なきにかきくられて、涙にむせぶばかりなり。義経へ判官哀れと見給いて、まことにこのたび思はずも、落人となり下る身を、これまではるばる慕いくる志、かえすがえすも神妙なりさりながら、はるばる波濤をしのぎ下らんことしかるべからず、まずこのたびは都へ上り、時節を待てとの御言葉、舟慶へ舟慶ともになぐさめて、ただ人口を思すなり。御心変るとな思し召そ、静へいやとにかくに数ならぬ、身には恨みもなけれど、それは舟出の門出なるに、浪風も静をとどめ給うかと、へ涙を流し木綿四手の神かけて変らじと、契りしことも定めなや、げにや別れよりまさりて惜しき命かな、君にふたたび逢わんとぞ思ふ。義経へいかに舟慶、静に酒をすすめ候え。へかしまつて候。へげにげにこれは御門出の、行末千代ぞと菊の盃、静にこそはすすめ候。舟慶へ旅の舟路の門出の和歌、これに烏帽子の候、召され候いてただひとさしとすすめ候。へ二上りへ謡ガカリへ立ち舞うべくもあらぬ身の、袖うちふるも恥かしや。二上りへ伝えきく、陶朱公は勾踐をともない、会稽山にこもりいて、種々の智略を

明治三年、二世杵屋勝三郎作曲。平家追討に勲功をたてた義経は、兄頼朝の不興をかって身のおきどころもなく、主従わずか十余人で都を出立、西国をめざして大物の浦に着く。そこであとを追ってきた愛妾静御前に別れをつける。

やがて一同が船に乗ろうとすると急に風が変り、義経のために滅ぼされた平家の一門が波の上にあられ、知盛の亡霊は薙刀を振るって義経におそいかかる。舟慶はこれを祈り伏せるといふ筋。

歌詞は能の「船弁慶」をほとんどそのまま借りたもので、題名は「船弁慶」でも、前半は静御前、後半は知盛の亡霊が主人公である。

明治初年、廃藩置県など大きな変革があつて、それまで江戸にいた諸大名たちは江戸を去つてしまつた。江戸時代に徳川をはじめ諸大名の庇護のもとにあつた能楽師たちは、生活のすべもなく、能楽そのものが極度に衰微してしまつた。そのとき日吉左衛門という能楽師は能の大衆化を考え、一般にアピールさせるために三味線の伴奏によつて能を舞うことを考へた。そして長唄の二世杵屋勝三郎と結んで蔵前で小屋掛けして能を興行した。これを「今様能」といふ。

能の歌詞を長唄に使つた例は、「鶴亀」、「紀州道成寺」、「橋弁慶」などがあつたが、これは動機が動機だけに、詞はもちろんのこと、曲も囃子も能のものを流用、一そう能の形式に近く作られていたのが特色。この曲や「安達ヶ原」などはそのときの作品。したがつて歌詞はほとんどそのまま、また能の手も多く流用しているが、曲がよくできており、現存長唄中屈指の名曲に数えられている。

とくに後半は三味線と囃子が存分に活躍するので派手で賑やかであり、そのため唄には技術と品格が要求される、きわめてむつかしいものとなつてゐる。

全曲を演奏すると約四十分を要する大曲だが、今日は時間の都合で、一部をカットして演奏します。

めぐらして、ついに呉王を滅ぼして、勾踐の本意を達すとかや、功成り名とけて身退くは、天の道と小船に棹さして、五湖に楽しむ。本調子へかかることしも有明の、月の都をふり捨てて、西海の波濤におもむき、御身の科のなきよしを、嘆き給わば頼朝も、ついににはなびく青柳の、枝を連ぬる御契り、などは朽ちし果つべき。謡ガカリへただ頼め、ただ頼め、しめじが原のさしも草、われ世の中にあらんかざりは、へかく尊詠のいつわりなくば、やがて御代に出船の、船子ども、はやともつなをととくとすすめ申せば、判官も、旅の宿りを出で給へば、静は泣くなく、烏帽子直垂ぬぎ捨てて、涙にむせぶ御別れ、見る目もいとやえいや、えいやあえいとゆう潮に、連れて船をぞ出だしける。へあら笑止や、風が變つて候、あの武庫山風ゆづりはが嶽より吹きおろす、風はこの船陸地につくべき様もなし、皆みな心中に御祈念候え。従者へいかに武蔵殿、この船にはあやかしがつきて候。舟慶へああしばらく、さよふのことは船中にては申さぬことにて候。へあら不思議や海上を見れば、西国にて滅びし平家の一門、おのおの浮かび出でたるぞや、かかる時節をうかがいて、恨みをなすもことわりなり。義経へいかに舟慶、舟慶へ御前に候、義経へ今さら驚くべからず、たとえ悪霊恨みをなすとも、そも何事のあるべきぞ、悪逆無道のそのつもり、神明仏陀の冥感にそむき、天命に沈みし平家の一類、主上をはじめ奉り、へ一門の月卿雲霞の如く、浪に浮かびて見えたるぞや。謡ガカリへそももこれは、桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽霊なり。へあら珍らしやいかに義経。へ思おもよらぬ浦浪の、声をするべに出船の、声をするべに出船の、知盛が沈みしそのありさまに、また義経をも海に沈めんと、ゆう波に浮かべる薙刀とり直し、巴波の紋、あたりを払い、潮を蹴立てて悪風を吹きかけ、眼もくらみ、心も乱れて、前後を忘るばかりなり。へそのとき義経少しも騒がず、その時義経すこしもさわがず、打物抜き持ちつつの人に、向うが如く、言葉を交し戦い給へば、舟慶押しへだて、打物業にてかなうまじと、珠数さらさらとおしもんで、へ東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威徳、北方金剛夜叉明王、へ中央大聖不動明王の、索にかけて祈り祈られ、へ悪霊次第に遠ざかれば、舟慶舟子に力を合わせ、御船を漕ぎ退け汀に寄すれば、なお怨霊は慕い来るを、追い払い祈り退け、また引く汐にゆられ流れ、また引く汐にゆられ流れて、あと白浪とぞなりにける。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございました。

この会も回を重ねまして、ごらんの通り八回目の演奏会を開催することができました。御協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

このようにして、邦楽が自主的に集まって演奏会を開くということは、今までにあまり例がありませんでした。これからは、この催しを土台にして、邦楽について考えたり、話し合ったりして、よりよい明日の邦楽のために努力して参りたいと思います。

ですから、今日おき下さいました御意見や御感想などを、お寄せ下さいますようお願い申し上げます。

何かと不行届の点もありますが、お許しを願ひまして、どうぞ御ゆっくりとお楽しみ下さいますよう、御願ひ申し上げます。

なお、来年もこの会を二月に開催いたしたいと思っております。まことに恐れ入りますが、はさみこみのアンケート用紙に御記入下さいますれば、御案内を差し上げます。

ありがとうございました。